



放子ヨウ当日の作業の様子 (平成16年5月)

今年も多数のさなぎを放子ヨウ
今年600頭を昨年と違う場所へ放子ヨウし、残り約260頭は羽に番号を書いてマーキングをしてオオルリシジミの行動範囲の調査を行いました。行動範囲を調査することによってオオルリシジミがこの辺一体をどのように行き来しているかが分かり、今後の生息資料として活用することができます。期待されます。

今年も多数のさなぎを放子ヨウ

た所(今年は放していない所)でオオルリシジミを見たとのニュースが早武会長に届きました。
会長はじめ地元の会員が何頭かのオオルリシジミを実際に確認し、昨年の成果に感動するのでした。守る会の活動がまさに実を結んだ一瞬でした。

放子ヨウ前にクララの生育調査をしている守る会会員



第3章 オオルリシジミを守る①

オオルリシジミを守る会

自然繁殖が目標 輪を広げたい

オオルリシジミを守る会は平成13年(2001)11月に発足。北御牧村の時から村内外に会員を呼びかけ、情報交換をしたり、人工飼育や繁殖地の保護育成に力を注いでいます。しかし、現在に至るまでにはかなりの時間がかかりました。

会発足までの経過

柴谷さんとの出会い

平成5年(1993)ごろからのオオルリシジミの乱獲を見て、早武さんが何とかしたいとの気持ちを抱いていた頃、武井秀彦さんから柴谷泰郎さんを紹介されるのです。柴谷さんは埼玉県で累代飼育をしていて、たびたび北御牧村を訪れていました。しかし、自身で飼っていたチョウの近親交配による危機的状況を心配し、地元の武井さんに相談するのです。武井さんは、チョウに詳しい早武さんに話を待ち掛けました。

何度か話し合ううちに2人は自らがチョウを育てながら保護していく必要を感じました。会が結成されるまでの数年間は、一部の地域や地権者の協力も得ながらク

クララの群落調査

次にクララの群落調査を行います。幼虫と成虫の天敵調査も行います。

こうした取り組みは、安曇野にある国土交通省国営アルプスあづみの公園とも連携し合っています。しかし、あづみの公園では、さなぎを放しても天敵や自然の摂理から自然発生を確認できない状況が続いているようです。東御市北御牧は、本州で唯一、自然のオオルリシジミを見ることが出来る地域となりつつあるのです。守る会では今後を見据えて、科学的な調査も行いながら、将来の増殖や自然繁殖への基礎資料を活動のなかで作ろうと努力しています。

「いつも試行錯誤ですよ。じっくり、しつかり息長く活動していくしかありません。でも、いつか自然での発生がごく普通にできる状況や、大勢の人たちがオオルリシジミを見られるようにしたいですね。」

「今後は協力できる方の募集と累代飼育ができる会員を増やして、この輪を広げていきたいです。」と早武会長は話していました。

今年、昨年放した場所でもオオルリシジミが自然観察でき、会員一同は胸をなでおろすとともに、早くも来年に向けて活動の準備を進めています。

ララの保護活動や捕獲マニア対策、慣れない飼育を柴谷さんとともに試行錯誤で行ってきたのです。しかし、早武さんは個人的な活動の限界を感じ守る会を立ち上げようと決心したのでした。

オオルリシジミを守る会が結成

そうした経緯から、平成13年11月に守る会が結成され、早武、武井、柴谷さんのほか、村外の昆虫研究者や地元的地権者、協力者など約20名が会に集まりました。

平成16(2004)年度には会員数は、約30名に増え、市外からも多くの皆さんが会に入っています。市外会員は累代飼育で活動に参加し、市内会員は保護増殖活動を中心に取り組んでいます。

平成16年度の活動 前年の成果を確認

まず、昨年春に800頭のさなぎを4カ所に放子ヨウした結果を確認することが今年の活動の第一課題となりました。つまり、昨年放したさなぎが野外で羽化し、交尾、産卵されたものが育ってさなぎとなつて、果たして今年自然にチョウとなつて野に舞ってくれるかどうか、会の皆さんにとっての一番の関心事でした。

「昨年放したオオルリシジミの子孫は果たして今年、野外で羽化してくれるだろうか・・・」会員の期待と不安が入り混じります。16年5月中旬、会員から、昨年放し

Interview with Taisaku Shibata (柴谷泰郎さん) from Saitama City. He discusses his personal experience with raising Ooerishijimi and his involvement in the conservation group. He mentions that he has been raising them since childhood and that the group was formed in 1993. He also talks about the challenges of raising them in a natural environment and the importance of having a safe place for them to hatch and grow.



柴谷泰郎さん (埼玉県さいたま市)
個人的に累代飼育をし、市内での放蝶を試みる。しかし放蝶場所のクララの草刈り等で活動が停滞。平成10年(1998)に上八重原で武井さん、早武さんに出会い守る会を立ち上げる。

子供の頃からチョウが好きで、信州には年に何回も出かけてきます。特にオオルリシジミにはずっと関心を持っていました。

平成5年(1993)に北御牧で幼虫を採集できたことから、飼育に必要なクララをプランタで用意したり、苗を育てたりして、埼玉県の自宅で累代飼育を行ってきました。そして、育てた蛹を数年間、北御牧に戻ってきたのですが、放した場所のクララが草刈られてしまうなど、個人的な活動の限界を感じていた頃、地元の武井さんと出会ったことが現在のオオルリシジミを守る会の結成につながり、とてもうれしく思っています。

会の活動が広がる半面で、悪質なマニアの危険もあります。子供たちに「オオルリシジミってどんな蝶だったの?」と言われたいよう、守る会の活動に今後も全面的に協力したいと思っています。



保護エリア内で警告を呼びかける看板

放子ヨウは、羽化2~3週間前に鉢にさなぎを放して行われる。羽化率は90%以上で放子ヨウ技術は確立されている。



Interview with Masahiro Hatake (早武基好さん) from Shimo-Ogino. He is the president of the Ooerishijimi conservation group and started the group in 1993. He discusses the group's activities and the challenges of raising Ooerishijimi in a natural environment.



早武基好さん (下八重原東部)
オオルリシジミを守る会の会長。オオルリシジミを守ろうと活動を始めた第一人者。